

## 食べる喜びを支える歯科医療のための デンチャースペース義歯

刊行にあたって

2009年にデンタルダイヤモンド社から出版いたしました増刊号『総義歯難症例への対応 その理論と実際 ニュートラルゾーン理論によるデンチャースペース義歯』が、おかげさまで完売いたしました。そして、このたびデンタルダイヤモンド社から、時代に即した内容に合うように、加筆・修正を行い、さらに、超高齢社会のニーズに応じて、在宅往診などのパートを加え、書籍として出版依頼を受けました。

そこで、編集委員会を開催し、内容を検討した結果、当時も患者さんと真剣に向き合って全身全霊を込めて治療をした結果をまとめた増刊号でしたから、写真の入れ替えや書き換えは極力控え、今日的なテーマを新たに加えて書籍にまとめることにしました。

わが国は、たいへん厳しい財政状況にあり、社会保険費、とりわけ医療費や介護費用をいかに削減するかの検討がなされてきました。そこで、地域包括ケア、フレイル予防という考え方に基づく介護予防が国の政策として打ち出されました。歯科界として、国の政策や社会の要望に応えるには、本書のタイトルにある『食べる喜びを支える歯科医療』を推進していかなければなりません。

超高齢社会に突入し、患者さんの顎堤は想像以上に吸収が強く、患者さんに満足してもらえらるる歯科医療を提供するには、全国の歯科大学および歯学部、歯科技工学校で教育されているカリキュラムでは対応できなくなっている現状があります。また、特別養護老人ホームで往診診療を行うと、8割の患者さんが認知症を患っています。日本歯科医師会もそのことに気がつき、各都道府県で認知症の講演会を実施していますが、医師による認知症の病態についての講義のみです。実際に、認知症の患者さんの義歯を製作する場合、その言動をどのように理解し、どのように治療を行えばよいでしょうか。

本書では、このような時代的背景に対応して、患者さんの顎堤条件の変化に対して舌房の確保や周囲組織との調和がとれたニュートラルゾーン理論によるデンチャースペース義歯で対応した症例、また、認知症患者をはじめとした高齢者に対して歯科衛生士や言語聴覚士などの多職種と連携して対応した症例をとおして、人がよく噛んで食べることの意義を解説しています。読者諸氏にとって、いま、そして未来に向けての羅針盤となる一冊になれば幸いです。

2018年3月

加藤武彦